

て、Sくんは耐えられないほどの痛みを感じたからなのかもしれない。しかし、少なくともその場に居合わせた筆者にはTくんの行為がそれほどの痛みを与えたとは思えなかった。しかも、筆者のフィールドワークで積み重ねられた知識から、ある種の違和感を感じた。つまり、Sくんはクラスの中のリーダー的な存在の一人であった。一人っ子であるSくんは「甘えん坊」の側面もたしかにあるが、それは母親と一緒にいる家庭内に限られることであって、マリア幼稚園の世界では彼が泣くという場面は、筆者が知る限りあまり見られなかった。しかも、Tくんに対してやり返すこともせずに、このときのSくんはやられれば泣くのみであった。だから、筆者には非常に奇異に感じられたのだ。

それでは、Sくんが泣くに至る他の道筋があったのだろうか。この表4-12からは、もう一つの文脈があることが読み取れる。つまり、「白いプラスチック容器の争奪戦」という流れである。最初に、Sくんがプラスチック容器を持って遊んでいた。彼はその容器に土を詰めて、固めて置くといった遊びをしていた。しかし、途中でTくんがそれを手に入れた。JくんにもSくんにも渡さずに、一人で独占していた。このように、最初にプラスチック容器で遊んでいたSくんが、その執心していたモノをTくんに取りられてしまい、きわめて不快な状態に置かれていたために、あるきっかけで「大泣き」としたという解釈も可能であろう。この場合、その直後の場面との整合性がきわめて高い。つまり、Sくんはプラスチック容器を取り戻すと、すぐに泣きやんで、それで遊んでいるという場面である(表4-12、11:35:00③)。

このような「白いプラスチック容器の争奪戦」という、録音・録画されたデータを何度も繰り返し聞き取るプロセスの中で浮かび上がった一つの枠組みは、ある種の説得力を持つものである。しかし、Kくんが、いきなり飛び出してきて、Tくんを蹴るといった行動まで説明できるものではない。そこには別種の枠組みが必要となろう。当日の砂場の中で展開されていた、「町づくり」とでも呼べるような共有された遊びにTくんは深く関与してはいないように見えるが、そのことに対して、Kくんはずっと我慢がならなかったという説明も可能かもしれない。また、Sくんに対するKくんの熱い友情の物語として語ることも可能かもしれない。先に述べたように、SくんとKくんは当時、同じ団地

で生活していた。彼らの父親が同一の大企業に勤務しているので、その社宅である団地で暮らしていたのである。彼らはマリア幼稚園内でも一緒に遊んでいるが、朝から同じバスで一緒にマリア幼稚園に登園し、降園後も社宅の敷地内の広場が互いの自宅に往き来して遊んでいた。この社宅に住む園児たちのグループのリーダー格がSくんであった。KくんはSくんに評価されたがっているように、フィールドワーク全体を通して筆者には見えた。このようなフィールドワークの経験を通して得られた知識からは、KくんはSくんを泣かせたTくんに仕返しをした、あるいは仇を取ったという説明が導き出されるかもしれない。だが、Tくんが裸足になったときにいち早く飛んできて、靴下を一生懸命に履かせようとしていたのは、まぎれもなくKくんであった。

本節では丹念に映像を見ていったが、砂場で生じていたやりとりはあまりにも多彩で複雑であり、表4-2のみからは、少なくとも万人が納得できるような説明が出そうにはないようである。結局は、筆者による一年間のフィールドワークで得られた知識に基づいた説明が顔を見せてしまう。さらに、その知識によつて導き出されたいくつもの説明も、理解可能な一つのストーリーとしては結実せずに、細かな断片の説明が並行して立ち並びながら、折り重なり続けるといった状況が続くように思われる。

### 男児の母親の語りから浮かび上がった〈出来事〉

前節では、録画されたデータをもとに筆者が作成した表4-2から、Sくんが泣くに至った説明を試みた。だが、正確には、表4-2のみからの説明ではない。筆者によるマリア幼稚園での一年間のフィールドワークから得られた様々な知識を交えながら、いくつかの解釈を行なうことによつて、妥当な説明を探したに過ぎない。この部分に、録画されたデータが日常的に用いられる近年における一つの問題が姿を現わしている。録画されたデータのみの分析によつてへ出来事への説明は可能かという問いである。<sup>(8)</sup> 昨今、日本国内でもエスノメソドロジー・会話分析は浸透し、きわめて特殊な変わった方法であるといった不理解に基づく蔑視はほとんど消えたと言えるだろう。しかも、社会学の中の「異教

徒一的な扱いの時代を経て、今日では社会学のみならず、心理学・教育学・工学・法学等の様々な領域で認知されるに至った。このことよって、録音されたデータもしくは録画されたデータをエスノメソドロジーという視角に基づき分析するといった研究スタイルが急速に広まった（心理学領域の生態学的なアプローチの分野では以前よりポピュラーではあったが）。だが憂慮すべきは、これらの録音・録画されたデータをただマニュアル通りにエスノメソドロジー風に分析すれば、「一本の論文」になるといった安易な態度も一部に見られることである。しかも、データの採集された時期と場所が特定されないものまでたまに見られる（確かに目的が異なる側面もあるが）。データが採集された時期と場所、つまりはそのデータの文脈が理解されてはいないにもかかわらず、録音された音声・録画された行動の説明が果たして可能なであろうか。データの「内部」に限った分析に、「外部」の視点を持ち込むべきではないという立場もあることだろう。この場合の「内部」とは何か。「外部」とは何か。果たして、その境界線は明確に存在するのだろうか。<sup>(9)</sup>

件の「出来事」の場合を考えてみたい。泣いた男児は、11時27分から11時37分の間のみ生きていたわけではない。それ以前に、母体から誕生してから、さらには受精してから1995年10月25日11時27分に至るまでの数年間が確かに存在する。そして、11時37分以降も、この世界で生活している。今日に至るまで、途中、親の転動によって日本国を離れることがあったが、生活はまさに「へいま」も続いている。少なくとも、1995年10月25日においても、11時27分以前の何らかの要因が、Sくんの大泣きに関与している可能性は否定できはしない。しかし、録音・録画されたデータに基づく分析は、そのような可能性を捨象せざるを得ない。非常に限定された情報、つまり記録された音声と映像でもって臨むしかないのである。私たちは以上のことを十分に理解している。筆者の場合は、偶然に件の「出来事」の前に生じていたことを聞く機会があった。逆に、その貴重な機会によって、さらに悩まされることになったとともに、本章を書く契機となったわけである。

具体的に述べると、筆者は上記の通り、マリア幼稚園に一年間の間、補助教員の役割も担いながらお邪魔させていただいた。特に、「生え抜き」のα組に通園させていただいた。<sup>(10)</sup>一年間の経験から、園児たちの名前を覚えるのはもちろん

のこと、互いの行動の特徴もある程度は理解し合えたように思える。そのみならず、実際に各々のご家庭にお邪魔させていただき、園児の母親に対して聞き取り調査も行った(宮内二〇〇三)。調査拒否は一人もなかったため、26人全員にうかがうことができた(α組には一組の一卵性双生児がいた)。基本的には、それぞれのご家庭にお邪魔させていただいた上で、筆者と一対一の面接調査というスタイルで行なった。お一人お一人の了承を得た上で、筆者とのやり取りはテープレコーダーに録音させていただいた(一人のみ拒否)。当初はお一人に対しておよそ1時間という前提で調査は行なわれたが、予定の時間を大幅に超える場合が多く、4時間を超える場合もあった。面接調査場面においては、子どものいじめや問題行動・子どもの身体の発達にまつわる問題・母親自身の夫婦関係に関する相談を受けることが少なくなかったが、そのことが予定の時間を大幅に超えた主な理由であるとともに、面接調査場面における雰囲気や調査者と被調査者の関係性についての判断材料を提供することになるのかもしれない。先にも述べたが、SくんとKくんが同じ団地で生活しており、降園後も仲良く遊んでいることや、その遊んでいる様子等も、この調査で知り得たし、実際に肉眼で確認することができた(筆者の肉眼が信頼できるか否かは別問題であるが)。

Sくんの母親は、マリア幼稚園の「保護者の会」の役員であった。だから、マリア幼稚園の行事の際には必ずスタッフとして参加されていた。筆者の幼稚園生活における保護者との会話では、Sくんの母親と話す機会がもつとも多かった。非常に社交的・外向的で、好奇心が強いように筆者には感じられたが、そのような志向性ゆえからか、筆者のフィールドワーク時には、幼稚園の中でもよく声をかけてくださった。Sくんの母親は3年間も役員を務められていたので、マリア幼稚園のいわゆる「事情通(the wise)」(Goffman 1963)と呼ぶに相応しい存在であった。筆者にとって、Sくんの母親は、文化人類学の領域で言われる、まさに「インフォーマント(informant)」、しかも重要なインフォーマントであった。そのSくんの母親によると、件の「出来事」の当日、Sくんは朝から熱っぽくて、かなりぐずっていたらしい。しかも、幼稚園にあまり行きたがらなかったという。つまり、Sくんは当日の朝から体調が悪く、気分が晴れず、泣きたいような要因に満ち溢れていたとも説明できる。件の「出来事」の当事者がこの世に生まれた瞬間から(いや、そ

れ以前からも) ずっと寄り添い続け、この当事者を見守り続けた一人の女性のことは重みを持っている。他のいくつかの説明が吹き飛んでしまうかのような決定的な説明であるように思える。

さらに、それらを後押しするかのような「出来事」が後に生じている。表4-2で記述した後の11時47分にSくんは再び泣いているのである。Sくんが再び当事者となって、同じ自宅に住んでいるα組の男児(表4-2では登場していない)との間に「トラブル」が発生していたのである。このような経過を見ていくと、ますます母親の語りから生まれた説明は説得力を増す。しかし、件の「出来事」の説明として決定してしまうには、いまだとまどいがある。

## おわり

フィールドワークにおいて、これまで問題とされてきたものの一つは、いわゆる「羅生門問題」と呼ばれてきた問題、より正確に述べるならば、芥川龍之介によって短編小説「藪の中」で提起された、「藪の中間問題」と呼ぶほうが相応しい問題である。<sup>(1)</sup> すなわち、ある「出来事」を当事者も含めた人たちが語る。しかし、各々の説明は異なっていた。共通の一つの「出来事」であるにもかかわらず、その「出来事」に対する各々の説明は異なっているという状況を表現したのが、「藪の中」である。この際、私たちは誰を、何を信用すればよいのだろうか。そして、私たちはどのような説明をすればよいのだろうか。映画「羅生門」において、黒澤明監督は彼なりの解答を示したが(解釈は分かれようが)、フィールドに行む私たちはいったいどうすればよいのだろうか。実際に私たちは、この問題に対する明確な解答を正面から提示することはなくとも、様々な可能性を示しながら、論文や著書や報告書といったかたちで一定の解答を示し続けている。

本章では、一人の男児に焦点を絞って、「出来事」の認識と説明の問題について述べた。つまり、ビデオカメラの普及によって、私たちは現在、容易に録音もしくは録画されたデータを入手できる環境にあることが多い。何度も繰り返し再生することによって、肉眼等では見逃していた行動を後から発見することができるようになったり、肉眼等ではとら

えることができなかつたきわめて微細な行動も観察が可能になった。このように非常に便利になった反面、新たな問題を抱えることにもなつたのではないだろうか。つまり、私たちはかつては肉眼等によつて、ある「出来事」をとらえてきたが、ビデオカメラを携えた私たちは録画された映像を何度も何度も繰り返し見ることによつて、「出来事」が私たちの中で変容していくという体験を始めたのではないだろうか。当然のことながら、記録された映像そのものが勝手に組み変わっていくことはない（変色等はあるだろうが）。しかし、見ている私たちの枠組みが映像の読み込みによつて変容を重ねていくうちに、「出来事」も揺らぎ始めるのである。さらには、記録された映像のみならず、長期間のフィールドワークによつて蓄積された体験と経験によつて、「出来事」は何度も揺らぎ続けるのかもしれない。

私たちは、フィールドにおいて、「藪の中」に放り込まれて呆然としている場合ではない。私たち一人ひとりも、記録されたデータを媒介にして、フィールドワークと音声・映像の分析の経験の深さと長さによつて、新たな「藪の中」を抱え込むことになつたのである。

つまり、ビデオカメラ普及によつて、新たな問題が出現したわけである。録音・録画されたデータを何度も繰り返し見ることによつて生じる一個人の中の解釈のズレ、これらのデータを倍速やスローモーションや逆回転で見たりすることによる発見から生じる一個人の中の解釈のズレ、これらのデータに対してフィールドワークで得られた知見から生じる一個人の中の解釈のズレといった、一個人の中の解釈の問題である。これは、既存の「羅生門問題」のような他者との認識の競合の問題とは別種の問題であろう。記録されたデータが持ち込んだ「一個人の中の超時間的な「藪の中」とでも呼べばよいのだろうか。たしかに録音・録画機器は、私たち研究者にとつて研究活動を進めていく上で、きわめて重要な役割を果たしている。だが、非常に便利になつたと同時に、別種の新たな問題も抱え込むことになつてしまつたようである。本章の冒頭で引用した佐藤郁哉氏は、カメラについて以下のように戒めてもいる。

「カメラに限らず、フィールドに機械を持ち込む時におきやすい最大の誤解は、次のようなものです——機械を使えば人

間の主観的解釈が入り込む余地が少なくなり、人間の不確かな知覚や記憶の歪みからも自由になり、したがって「客観的な情報」が手に入る。(佐藤一九九二、二二四頁)

私たちは、機械を手にすることによって、どうやら自由にはならなかったようである。逆に、ますます露深い「藪の中」に迷い込む結果となったのかもしれない。一個人の中にも、いくつもの「主観的な解釈」が林立している。このような場合に、私たちは、いかにして、どの解釈を選ぶのか。その際に決定的な要因となるのは何なのか。もはや私たちは「出来事」を語ることはできないのであろうか。

本章を終えるにあたり、この問題群は、保育現場の日常生活における問題と連なっていることを付け加えておきたい。本章は、「フィールドワーク」という特殊な領域における理論的な問題のみには終わらない。表4-2において、Sくんが大泣きする前に、YくんとNくんが土の付いた汚れた手で、筆者のビデオカメラのレンズを触ろうとしていたことが描かれている(表4-2、11時31分からのおよそ1分間)。このように、保育現場における保育者は常にのんびりとは働かかけを受け続けている。一、二人の子どもにも意識を集中し続けることは(保育環境にもよるだろうが)かなり困難であろう。ゆえに、何かが生じた際に、見間違いや誤解が生じやすいということになりはしないだろうか。少なくとも、そのような環境にある保育者は多いのではないだろうか。仮にそうだとすると、保育現場で生じた「出来事」を理解した上に、その原因を説明するという行為はきわめて難しいのではないだろうか。しかも、子どもたちの親に「出来事」を説明せざるを得ない状況になった際に、「正しい説明」を行なうことは果たして可能だろうか。常に誤解をする危険性<sup>(12)</sup>がつきまとっていると考えておいたほうがよいのではないか。本章でなされた問題提起は、フィールドワーカーのみに限定される特殊な問題ではない。たしかに教育・保育実践者とフィールドワーカーを一緒に論じることが乱暴ではあろうが、「出来事」の説明の妥当性の問題は、保育現場の保育実践者にも毎日のように突きつけられた問題である

とも言えるだろう。さらには、法化社会へと進行しているようにも見受けられる日本社会において、〈出来事〉の説明は今後ますます重要性を増すことが予想されるとともに、私たちの社会生活、さらには人生をも左右するきわめて切実な問題に膨れあがっていく可能性も持っている。

### 〔付記〕

本章は、一九九四～一九九六年度および一九九八～二〇〇〇年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費による研究成果の一部である。幼稚園を中心としたいくつものフィールドワークを可能にさせてくださった日本学術振興会に感謝致します。

そして何よりも、筆者を受け入れてくださった当時のマリア幼稚園の皆様方に心より感謝申し上げます。

また本章は、一九九九年一月二三日午後北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター（現・北海道大学大学院教育学研究科附属乳幼児発達臨床センター）で開かれた第2回相互行為分析研究会で報告した内容をもとにしている。その際の報告内容は、どこにも投稿せずに、その後ずっと心中で暖め続け、ふさわしいと思われる発表メディアを探し求め続けていた。その数年後に「質的心理学研究」が誕生し、しかも「フィールドワーク特集」という、もつともふさわしい発表の場を得られたことから感謝したい。原稿にも、「幸福な出会い」があるものと信じている。

### 〔注〕

(1) 本章は、二〇〇四年四月に新曜社から発行された「質的心理学研究」第三号に掲載された採択論文「〈出来事〉の生成―幼児同士の「トラブル」に見る説明の妥当性について」(二八―四八頁)に若干の修正を加えたものである。本書への転載を認めてくださった日本質的心理学会ならびに新曜社の皆様には心より感謝申し上げます。

(2) ただし、いつでも、どこでも録音と録画が可能というわけではない。「対象」とされる人たちの了承が得られなければ、カメラの持ち込みが許されないことは言うまでもない。だが、たとえ了承が得られたとしても、カメラの参入によって、フィールドに混乱を生じさせることもあることに注意したい。詳しくは、宮崎(二〇〇一)などを参照のこと。また、撮影の了解が得られて、撮影が順調に進んでいても、研究上においてもっとも重要な場面が録画できるわけではない(たとえば、

Jordan 1993)。



(3) このデータは、筆者が独自に行なった北海道における調査によって得られたものである。この調査から、調査当時は「ニユーカマー」の園児を中心に、途中入園・退園が頻繁で、月ごとにおいても外国籍園児の在籍者数が増減していることがわかった(宮内一九九七)。「学校基本調査報告書」で確定されている数値の背後には、数値としては現われてこない様々な動向があることが推測できる。

(4) 石黒は、三脚で固定して撮影することの利点として、①場面全体を撮ることができること、②次第にカメラへの注目を弱めることができることを挙げている(石黒二〇〇一、一六一―一七頁)。

(5) マリア幼稚園の一日の生活に関する詳細は、宮内(一九九八b)を参照していただきたい。補足すれば、日本国内のすべての幼稚園が同一のタイムスケジュールで動いているわけではない。できれば、宮内(一九九九)と比較していただきたい。

(6) 好井(一九九九)、さらに山田・好井(一九九八)など。

(7) 多くの研究者が指摘するように、「完全なトランスクリプト」の作成は不可能である。だからといって、分析者による恣意的な削除などという行為は許されるべきことではないだろう。この点に関しては、一つの事例をもとに、好井論文(一九九四)では興味深い論が展開されている。

(8) 本章では少し触れるにとどめておくが、ここにはいくつかの重要な問題が隠れている。撮影者(もしくは、その現場にいた調査者)と分析者が同一人物であるか否かという問題、そして分析者は何者であるのかという問題である。前者に関しては、たとえば石黒氏は、その現場にいたことによって、「その場になかった者には理解できないようなビデオの中の発話の意味も理解できることがある」一方で、「視聴覚データを冷静に「読み込む」ことをできなくさせるという危険性」も同時に指摘している(石黒二〇〇一、四頁)。後者の問題に関しては、これまでは分析者が研究者以外の何者でもないという前提で論が進行することが多かったが、「実践者」と「研究者」というポジションが別個の独立した人格である時代は終焉を迎えている。大学及び大学院における社会人入学制度の普及によって、「実践者」であり、かつ「研究者」であるという人たちは増え、抱え込まれているのかもしれない。

(9) 好井論文(一九九四)では、「螺旋運動としてのエスノメソドロジー」という魅力的なフレーズのもとに、この問題における解決への一つの道筋が示されている。

(10) 正確に述べると、このフィールドワーク以前に、北海道における外国籍園児が在籍していた幼稚園への調査の際に、マリア幼稚園にはお邪魔しており、その場でα組の園児たちの一部にはすでに会合している。

(11) 黒澤明監督による映画「羅生門」(一九五〇年)に言及しながら「羅生門問題」を論じたものとして、池宮(一九九三)、浜(一九九五)、やまだ(一九九六)などがある。なお、筆者は、映画「羅生門」ではなく、同じく「藪の中」を原作とした映画「MISTY」(三枝健起監督、一九九七年)を用いながら、講義等でいわゆる「羅生門問題」について論じてきた。例えば、琉球大学教育学部においては「藪の中」からの抜け出し方」というテーマで集中講義を行なわせていただいたことがある。この「羅生門問題」、「藪の中問題」に関しては数編の別稿を準備している。

(12) 筆者が実施した日本国内の各幼稚園での聴き取り調査の結果によると、幼稚園教諭たちがストレスとして認識しているのは子どもたちとの関係ではなく、保護者たちとの関係が大半であった。たとえば、園内で生じた園児同士の「トラブル」をどのように当該園児の保護者に説明すれば良いのかに関して悩んでおられた。このことに関しては、稚内市幼児教育研究協議会保育研修部会講演会において「幼児教育の現場におけるへおとな子ども」とへおとな子どもをめぐめる問題について」と題して、お話しさせていただいたことがある。

#### 【文献】

池宮正才 一九九三 「それぞれの「現実」―行為の理解と社会的現実」、山中速人(編)『ビデオで社会学しませんか』有斐閣、三七五―三六頁

石黒広昭 二〇〇一 「フィールドリサーチにおけるAV機器―ビデオを持ってフィールドに行く前に」、石黒広昭(編)『AV

機器をもってフィールドへ』新曜社、一一―三五頁

佐藤郁哉 一九九二 『フィールドワーク』新曜社

浜日出夫 一九九五 「エスノメソドロジーと「羅生門問題」」、「社会学ジャーナル」(筑波大学社会学研究室)第二〇号、一〇―三

一―二二頁

箕浦康子 一九九九 「フィールドワークの基礎的スキル」、箕浦康子(編)『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房、二一―四〇頁

宮内洋 一九九七 「外国籍園児が在籍する北海道の幼稚園」、「季刊子ども学」一七号、ベネッセコーポレーション、一一―六一

- 宮内洋 一九九八a 「外国籍園児のカテゴリー化実践」、山田富秋・好井裕明(編)「エスノメソドロジの想像力」せりか書房、一八七―二〇二頁
- 宮内洋 一九九八b 「韓国・朝鮮」籍の子どもが通う日本の幼稚園―エスノグラフィの記述におけるひとつの試みとして」志水宏吉(編)「教育のエスノグラフィ」嵯峨野書院、一五七―一七二頁
- 宮内洋 一九九九 「沖縄県離島部における幼稚園生活のエスノグラフィ的覚え書き」、北海道大学教育学部紀要」七八号、一―一四六頁(後に、「心理学の新しい表現法に関する論文集」第八号に再録)
- 宮内洋 二〇〇三 「子どもたちはマリア幼稚園で何を学んだのか?―マリア幼稚園母親調査をもとに」、札幌国際大学紀要」三四号、一四五―一五三頁
- 宮崎清孝 二〇〇一 「A V 機器が研究者によって実践に持ち込まれるという出来事―研究者の異物性」、石黒広昭(編)「A V 機器をもってフィールドへ」新曜社、四七七―三七三頁
- 好井裕明 一九九四 「螺旋運動としてのエスノメソドロジ」、社会情報」(札幌学院大学社会情報学部)第三卷第二号、九一―一〇三頁
- 好井裕明 一九九九 「批判的エスノメソドロジの語り」新曜社
- 山田富秋・好井裕明(編) 一九九八 「エスノメソドロジの想像力」せりか書房
- やまだようこ 一九九六 「映画『羅生門』にみる証言の場の多重性―当事者・目撃者・傍観者の語り」、菅原郁夫・佐藤達哉(編)「現代のエスブリー目撃者の証言：法学と心理学の架け橋」至文堂、一八八―一九四頁
- Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall, Inc. (石黒毅(訳) 一九八七「ステイグマの社会学―烙印を押されたアイデンティティ」せりか書房)
- Jordan, B., 1993, *Birth in four cultures: A crosscultural investigation of children in Yucatan, Holland, Sweden, and the United States*. Waveland Press. (宮崎清孝・滝沢美津子(訳) 二〇〇一「助産の文化人類学」日本看護協会出版会)
- Smith, D., 1978, "K is mentally ill: The Anatomy of a Factual Account", *Sociology*, 12, Vol. 1, 23-53. (山田富秋・好井裕明・山崎敬一(編訳) 一九八七「Kは精神病だ―事実報告のアナトミー」「エスノメソドロジ」せりか書房、八一―一五三頁)



## 無欲の厚い記述

二〇〇四年秋、私は臨床心理学を専攻する大学3年生と4年生のゼミを担当していた（正確に述べると、二人のみ社会心理学専攻）。二〇〇四年一月一九日一五時というあまりにも早い締め切りに向けて、4年生の学生たちは卒業論文に没頭していた。3年次から計画的に卒業論文を進めていき、4年次になるとすぐに卒業論文を書き続け、すでに完成間際だった人もいれば、卒業論文から逃避しようとしても頭から離れずにつつと頭痛の種になっていた「野郎ども」もいて、その進展は様々だった。3年生のゼミ生たちも、冬の研究発表会に向けて、自らの卒業論文のテーマ探しに頭を悩ませていた。そして、私のもとには他のゼミ生も含めて、テーマの相談ごとが持ち込まれていた。私のメールアドレスを知っている宮内洋ゼミのメンバーからは、相談や不安の吐露がメールで次々に寄せられる。いきなり携帯電話にかけてくるようなメンバーは一人もいない。携帯電話にかけてくるのは、緊急の用件が、4年生が就職の内定をもらった際の朗報くらいだ。

3年生のメンバーにはすでに卒業論文に向かって走り始めたメンバーもいた。二〇〇四年度の場合是一人や二人ではなかった。その中の一人のMさんは、自ら地元の

施設と連絡を取り、一か月しかない短い夏休みに実家に帰省した折に、その施設にお邪魔させていたたくことができた。Mさんからは施設に行くことを聞いていた。そして、「何でもかんでも見聞きしておいで」と励まして送り出した。そのときの私は、自らの経験から、「施設見学」だと見なしていた。施設側がよく受け容れてくれたと驚いてさえた。昨今の予算削減によるマンパワーの不足のため、より一層忙しくなっている施設で、卒業論文のためにお邪魔したいと一学生がわずか一度のお願いでは断られるのがオチであろうし、たとえ了承していただけたとしても数時間ほどの見学が許され、その日の業務の状況次第では職員の方から少しの説明くらいはなされるかもしれないと思っていた。そして、いまその認識を改め、反省している。私は施設にお邪魔するのに非常に苦労してきたので、その体験から、物事を予測していたのだ。

夏休み期間中に、Mさんからメールが届いた。

内容の概略は以下の通りだった。施設の見学は三日間であること。初日は無事に終わったこと。ただその場で邪魔にならないように見るだけのつもりであったけれど、施設側が丁寧にスケジュールをすでに組んでくださって

いたこと。職員の方と施設をまわりながら二時間もお話ししたこと。そして、その場で生活している方と一時間ほどお話ししたこと。明日は、その施設の責任者が二時間も時間をとってくださっていることであつた。そして、明日何を話せばよいのか、二時間もどうすればよいのかわからなくて、とても困っているといつた内容だつた。

このメールを読み、私はかなり驚いた。Mさん自身も戸惑っていたことだろうが、私の体験では、到底予測できないような状況になっていたからだつた。時のめぐり合わせ、場の違い、施設のある地域性、かのじよ自身の人懐っこい持ち味(俗に言うところの「キャラ」)など、いくつもの要素が絡み合った末の結果であらう。慌てて返した私の返答は以下の通りだ。

・ とにかく、今日一日に見たこと、聞いたことで不思議に思ったこと、疑問に感じたことを書き出しておくこと。

・ その責任者の方にお会いしたときには、相手が話されることを一生懸命に聞いて、メモすること。

・ わざわざお時間をつくってお話ししてくださいること。対して感謝の気持ちを忘れないこと。

・ お話をうかがっているときに、わからないことばや意味がとれないことがあるれば、恥ずかしがらないで、その場ですぐに尋ねること。それでもわからないときはもう一度尋ねてみて、わからないままにはしないこと。いい加減にしてしまうことはとても失礼なことだ。

・ 時間があれば、お話をうかがったことをその場で自分のことばでまとめてみて、誤解や間違いがないようにもう一度確認してみることに。

・ 質問を促された場合は、昨日まとめた不思議に思ったことや疑問に感じたことを正直にぶつけてみることに。このようなことをMさんにはアドバイスしたように覚えていく。

夏休み直前には、このようなことも話していた。

・ まずノートを購入するか、家にあるノートを使って、施設に行った日の日記を書くこと。

・ その日記は詳しく、詳しく書くこと。見たこと、聞いたことはできる限り、何でも書くこと。

・ 「こんなことを書いてしまうと読まれたら恥ずかしい」などと考えないこと。これは日記なのだから。

さて、夏休みが明け、Mさんが読んでほしいと持ってきたノートに目を通して、案直に私は驚いた。かわいいういキャラクターが表紙になつているピンク色のノートの中に手書きでびっしりと詳細に書かれたその内容に魅了されたのだ。「フィールドノーツ」もしくは「フィールドノート」ということばが存在することを知らないMさんだが、そのノートは立派な「フィールドノーツ」であつた。しかも、話をしていた際に、誰がどこに座つていたかなどを图示するなど、私自身のフィールドノーツによく似ていた。

かのじよは当時、心理学科臨床心理専攻の3年生の学

生だった。フィールドワークに関する科目は一つも履修していなかった。だから、フィールドノーツの書き方などについてはまったく知らないと言ってよい。私のフィールドノーツを見たということもない。私自身はフィールドノーツをこれまで一緒に生活している連れ合い以外には、誰にも見せたことがないからだ。方法論に関しての講義を受けたとすると、私が心理学科創設以来ずっと担当させていただいた「心理学基礎実験―およびⅡ」においての実験の方法論くらいだろうか。かのじゅが入学して以来、ほぼずっとアドバイザーであったので、履修科目は把握していた。

本書の第一章で私自身の人生最初の聞き取り調査について述べているが、何も知らない方が良いのではないかと考えることがある。知らないから一生懸命に聞く。知らないから一生懸命に見る。やり方はわからないけれども、一生懸命に記述する。どうしてよいのかわからなくて悩む。自分なりの工夫をする。フィールドワークという営みは、そのように非常にシンプルなのではないか。システムティックな方法論を学習すれば、非常に洗練されたフィールドワークができるのかもしれないが、私としてはフィールドワークとは非常に泥臭い、いつまでたっても垢抜けない鈍くさい営みではないかと思う。その際、何も知らない方がよい場合があるように改めて思った。サイドによる「アマチュアリズム」で理論武装をしてもいいかもしれない。自らの勉強不足を棚上げして、

サイドの思想の裏に隠れることはあまり勧められたことではないかもしれないが、私にはこのことは持つ重みがじんわりとだが、しつかりと感じられてきたようにも思える。

\* 「アマチュアリズムとは、専門家のように利益や褒賞によって動かされるのではなく、愛好精神と抑えがたい興味によって衝き動かされ、より大きな俯瞰図を手に入れたり、境界や障害を乗り越えてさまさまなつながりをつけたり、また、特定の専門分野にしばられずに専門職という制限から自由になって観念や価値を追求することという」(M. サイド(著) 大橋洋一(訳) 一九九五「知識人とは何か」平凡社、一二〇頁)

**第五章**  
**フィールド  
ワーカーと時間**

---

フィールドへの参入。緊張。不安。畏怖。時間が経つにつれ、そのような感情もうすれていくのかもしれない。フィールドから抽出されたことばや場面の意味も変容していくことだろう。フィールドワークから、時間を捨象することはできない。

本章は、あるシンポジウムのフロアから出された質問から始まる。その質問とは、要約してしまうと、「フィールドワーカーに寿命はあるのか」というものだ。この質問に答えることを通して、本章ではフィールドワーカーと時間をめぐる問題について述べていく。

---



## はじめに

まず、あるシンポジウムのやり取りから始めたい。

パネリストを務めさせていただいた私は、質疑応答時にフロアからこのような質問を頂戴した。

「社会学研究科の院生です。宮内先生が『墮落』という言葉を使われましたが、私は常日頃から、『フィールドワーカーの寿命』について考えています。今は私はD3になってしまいました。マスターの頃から長らく調査している団体では自分に対する扱いが変わっていることに気がつきました。最初から僕を知っている人は「若い兄ちゃんに話を聞かせてやろう」という態度なのでですね。ところが僕が非常勤講師などになって曲がりにも「先生」と呼ばれるようになってきた頃にはびっくりと変わってきた。最初から僕を知っている人は「先生」と呼ぶんですが、やっぱり障害をもつ子どもの親って「先生」と呼ばれる人にアレルギーをもつてますからちょっとやかして「センセー」なんですよね。でも新しく来た人はそんなこと知らないから「センセー」を「先生」と勘違いしちゃいます。そうなるともう「話を聞かせてやろう」ではなくて「子どもについての相談」にいつの間になっちゃってる。ひよつとしたら最初の頃よりいい話が聞けなくなっているのではないかと。調査と言うよりも面接をする気分になってしまう。どうやったらフィールドワーカーとしての寿命を延ばせるんでしょうか？ こんなにおもしろいことやめたくないのですが……寿命について意識をはっきりと持っている宮内先生にお聞きしたいのですが」（章山・宮内ほか二〇〇四、六七頁）

これは、二〇〇三年九月五日に立命館大学人間科学研究所で行なわれた一般公開シンポジウム「フィールドでの〈声〉をどのように聞くのか？——「加工」以前の現場研究覚え書き——」（日本心理学会第6回フィールド心理学研究会・立命館大学人間科学研究所公開研究会（学術フロンティア・コアプロジェクト研究会））での一コマである。

ここで言われているように、フィールドワーカーには果たして「寿命」はあるのだろうか。

この疑問に答える前に、心理学の領域で争われたパーソナリティに関する論争において、日本国内では非常に重要な

と思われる一つの論文を紹介したい。その論文は、渡邊芳之・佐藤達哉両氏による「パーソナリティの一貫性をめぐる「視点」と「時間」の問題」である（渡邊・佐藤一九九三）。先の論争とは、いわゆる「人か状況か論争（person-situation debate）」もしくは「一貫性論争（consistency debate）」と呼ばれるものである。つまり、ハーツホーンとメイ（Hartshorne & May）による子どもの研究に対するオールポート（Allport）の批判を源とし、ミッシエル（Mischel 1968）の「Personality and assessment」という一冊の本によって急激に激化した、パーソナリティには「状況を超えた一貫性・通状況的一貫性（cross-situational consistency）」があるのか否かという論争である（詳細はKrahe 1982）。やや乱暴に言い換えれば、個人のパーソナリティは様々な状況を超えて、一貫しているのか否かという論争である。「行動に見られるパーソナリティの通状況的一貫性」がデータからはほとんど証明されない中（Bem & Allen 1974）、一方は状況によってパーソナリティが変化するなど考えられないと主張し、もう一方は様々な状況を超えてパーソナリティが一貫し続けるるとは言い難いと主張していたのだ。しかし、ミッシエルによって客観的データから導き出された「パーソナリティの通状況的一貫性を否定する」という主張はあまり正しく理解されずに、ミッシエルが人間のパーソナリティそのものを否定していると誤解されたことが、この論争に火に油を注ぐ結果となった。この渡邊・佐藤論文では、ミッシエルの上記の主張を冷静に正しく理解した上で、その後の議論の整理を、観察者と被観察者における「視点」と「時間」という独自の観点から行ない、その観点から問題提起を行なっている。この問題提起は、フィールドワークに關しても、きわめて有益であるとは私は考えた。そこで、本書の最終章はこの渡邊・佐藤論文に沿いながら、進めていくこととしたい。さらに、「時間」の問題に關しては、この論文に沿いながらも、フィールドワーク固有の問題を付け足したい。そうすることによって、本章の目頭部の質問に答える準備が整うのではないだろうか。

### 渡邊・佐藤論文における「視点」の問題

まず、視点に關してである。この渡邊・佐藤論文では、ある人物に対する観察者の視点によって区分している。つま